

水草栽培の楽しみ (二)

南 敦

6. タヌキアヤメ 田 葱

水湿地に生育するタヌキアヤメ科の多年生草本。花茎が出たときは0.8～1mにもなり、濃い緑色の茎葉は美しい。熱帯から亜熱帯に分布する植物で、北村四郎・村田源・小山鉄夫共著「原色日本植物図鑑」(下)によれば日本での分布は九州(南部)・琉球、外国では台湾・中国・印度・マレーシア・オーストラリアとなっている。

筆者は昭和47年8月22日九州西部の五島列島福江島の翁頭の池や周辺の湿地に多数生育しているのを見た。日本では南方系の、ごく稀な植物で福江島では日本における分布の北限地帯にあたるが、それでもここでは各地の池・湿地などに多数生育していたのである。ここから数本をもち帰り、育てることにした。バケツに土を入れ、これより1～数cm上になるように水を入れて植えこみ、光のよく当たる場所に置くと、非常にはやくすくすくと育ち、株も増えた。土は畑土でも田土でも何でもよい。特に病虫害はない。冬の低温には極めて弱いので、分布地より低温になるような所では必ず温室に入れなければ

ならない。葉状がアヤメに似ていて、穂状房と果実に毛を密生する姿がタヌキに似ているので「タヌキアヤメ」と名づけたという。なお、筆者は昭和50年8月2日にトカラ列島中之島の中学校近くの湿地で小数ではあるがタヌキアヤメを見ている。なおこれらの証拠標本は山口県立博物館に納入している。

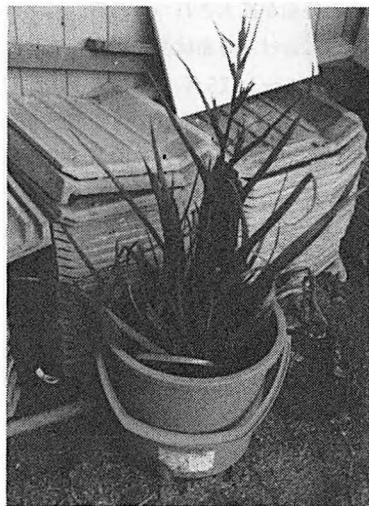
○参考文献

- (1) 伊藤武夫(1925)・タヌキアヤメ 台湾植物図説 P 673 国書刊行会
- (2) 北村四郎・村田源・小山鉄夫(1964)・タヌキアヤメ 原色日本植物図鑑(下) P 170 保育社
- (3) 南 敦(1973):五島(長崎県)の植物 エヒメアヤメNo.22 P 27～35 愛媛植物研究所

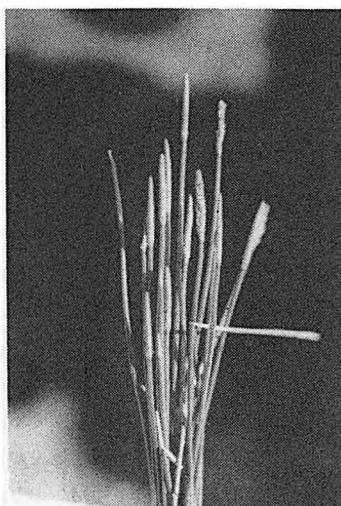
7. シログワイ

シログワイは各地の池・沼・溝などの水中によく生育する植物で、私の現在校・山口県立柳井高校北側側溝にも多数生育している。そのシログワイによく似たシログワイを昭和52年10月27日、山口県柳井市余田の堀川に

において筆者が見つけた。これが中国地方での初記録で現在も他に見つかっていない。生育する堀川は山陽本線柳井一田布施間の線路に沿った県道の傍にある幅5mの川であるが、水の流れは遅い。シログワイは非常に多量に密生している。所によってはアサザ・サンカクイ・マコモ・ヒシなどと混生し、生育範囲は数百mにおよんでいる。栽培はきわめて容易である。バケツなどに土を入れ、これより数cm上になるまで水を入れて植えこみ、光のよく当たる場所におけばよい。土は何でもよい。4月より稈はほとんど伸びて美しい。病気や虫害はない。ただ、非常に折れやすいので人が触れたり、強風のあたる



タヌキアヤメ



シログワイ

少し紫を帯びた緑色の葉は上品で艶やか。そう生した稈は美しい。夏から秋にかけて花序と果実に毛を密生した様は「タヌキ」で穂をつける。(S. 53.11.20撮影)に以ている。(S. 48.10.10撮影)

ような所に置いてはならない。柳井市余田のシログワイの形質は次のとおりである。稈の長さは60~100 cm, 平均76 cm。稈の幅は3~4 mm。若い稈は紫色ないし紫色がかっているが、成熟した稈は鮮緑色が多い。稈基の鞘は陽赤色で薄い膜質。地上茎の先端に増殖芽を生じるがシログワイと異なって塊とならない。従って食べられるものにならない。穂は円柱形で4~5 cm, その幅は3~5 mm。穂の先は鈍く円切形。穂の色は白緑色で、穂のリン片はやや密に着いている。穂のリン片の先は円切形ではない。また、穂のリン片の長さは4~5 mm, 幅は3~4 mm。穂のリン片の色は中肋は緑色で他は白色。したがって穂全体は白緑色に見える。柱基の幅は果実の幅の1/2~2/3。

シログワイの分布は亜熱帯・熱帯で日本では本州(三浦半島・紀伊半島)・九州・琉球, 外国では台湾・中国南部・アフリカ・印度・マレーシア・オーストラリア・太平洋諸島である。

国立博物館で所蔵の標本を昭和55年7月30日調べたところ、次のものがあつた。

- ① 薩摩 出水郡 ユウチ村 1930 S. Sato (No. 228098)
- ② 熊本 玉名市 梅林 1965. 8. 21 浜田善利 (No. 215297)
- ③ 沖縄 国頭郡 1938 金城鉄郎 (No. 222143)
- ④ 紀伊国 南牟婁郡 有馬池 1931. Oct. 15 大井次三郎 (No. 222165)
- ⑤ 支那 Oct. 3 1933 御江久夫
- ⑥ 山口県 柳井市 新庄 Oct 27, 1977 南敦 (No. 356537)

() は国立博物館の標本番号を示す。

記事はなるべくラベルのとおりを記したつもりであるが、一部カタカナを漢字にしたものもある。

国立博物館に標本は入っていないが三浦半島の分布について次の論文がある。

大谷茂・小山鉄夫：三浦半島のシログワイの記録 横須賀市博物館研究報告第6号(自然科学)1961年3月

未筆ながら国立科学博物館の標本を心よく見せていただいた同館の金井弘夫先生に深甚の謝意を表わす。また、貴重な文献を見せていただいた山本明先生に厚く御礼申

し上げる。

○参考文献

- (1) 北村四郎・村田源・小山鉄夫(1964) シログワイ 原色日本植物図鑑(下) P 288 保育社
 - (2) 南敦(1979) 山口県の注目すべき植物(その6) ⑬シログワイ 植物手帳 152 P 4 植物手帳の会
- #### 8. ハマジンチョウ

「五島列島には、海の中に木が生えていて、その木は潮が満ちれば見えなくなり、潮が干くとまた出てくる。その木はジンチョウウに似ている」と。

昭和47年8月25日、五島列島(長崎県)奈留島の植物を調査する時、大串の海岸でハマジンチョウウを見ることが出来た。このハマジンチョウウは満潮時にも海水にわずかしか浸らないものから、2 mもある木が全部浸るものまであった。しかし、同じ大串のある場所ではその土地が隆起したためであろうか、ハマジンチョウウ群落は満潮線より完全に上でススキ・チガヤなどを混ぜていた。生育は海水に浸るものより、むしろ良好であった。筆者は大串より小苗を数本持ち帰り、①海水中、②淡水中、③陸上植物と同じ、の3種類で育ててみることにした。①はうわ薬をよくぬった植木鉢の底孔をコンクリートでつぶし、この植木鉢に土とそれより数cm上まで海水を入れ、ハマジンチョウウを植えこんだ。②は海水の代りに淡水を入れた。③は普通の植物と同じ方法で植えた。ところが①②③共、よく育ったのである。メヒルギやオヒルギを色々な方法で育てたことがあるがハマジンチョウウも淡水中や陸上でも充分育つわけである。ただし、ハマジンチョウウは亜熱帯性植物なので、冬期は寒さに弱く温室に入れる必要がある。

ハマジンチョウウは海岸に生える常緑性低木で、五島列島はこの種の北限地帯にあたる。その分布は亜熱帯で本州(三重県五ヶ所湾)・九州(西海岸・種子島)・琉球・台湾・中国(南部)である。

○参考文献

- (1) 北村四郎・村田源(1971) ハマジンチョウウ 原色日本植物図鑑 木本編(1) P 38 保育社
- (2) 南敦(1973) 五島(長崎県)の植物 エヒメアヤメ No. 22. P 27~35 愛媛植物研究会